真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

たすけ一条の心を治めて

教祖百四十年祭

熱心におつとめを勤める未来のようぼくたち（3月30日少年会芦津団総会より）

教祖が現身をお隠しになられた日のおさしづでは、これから広くおさづけの理をお渡しくださり、扉を開いて世界たすけへと踏み出されることをお示しくださいました。その後、おさしづを仰ぎながら別席制度が整えられ、現在の形になりました。

別席は、おさづけの理を戴くための単なる過程ではありません。親神様の思召を度重ねて聴くことで心に治まり、真に陽気ぐらしができる生き方と心遣いを身に付けることが真の目的です。ようぼくを目指す人は、お話を聴いて分かったこと、気付いたことを、少しずつでも毎日の生活で実行することで、成人の道を歩むことができます。お話を聴いては実行し、実行してはまたお話を聴くことを9度繰り返すことで心が洗われ、ようぼくにふさわしい「たすけ一条の心」へと生まれかわっていくのです。

すでにようぼくであるお互いは、「これまで子供にやりたいものもあった」と仰せくださる親神様の御望みにお応えして、1人でも多くの方に陽気ぐらしができる心を治めてもらおうと、身近な方を別席へといざない、「1教会2名以上の初席者」を目指しておたすけに励みましょう。

さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。　明治20年2月18日

四方正面

幼少の頃、食卓に大根の煮物ばかり続いて苦手な物の一つになった。しかし苦い思い出は、年祭の度毎に、必死にこの道を繋いでくだされた親への感謝の心へと変わっていったように思う。

論達を拝読すると、「水を飲めば水の味がする」と、日々親神様の大きな御守護でお守りくだされていることを思えば、自分の悩みも小さなことに思える。

「ふしから芽が出る」と、大事が起きても必ずその先に大きな喜びがあると仰せられている。

そして、「人救けたら我が身救かる」と、人だすけに歩む中に必ず幸せは訪れるから、神様に凭れ切って通ることをお教えくだされている。

ひながたの道を慕う我々は、教祖にお喜びいただく道をそれぞれに託されている。

自分勝手な解釈をせず、諸先輩方に続き、素直に胸を張って歩みたい。（木）

《3月月次祭　挨拶》

おぢばへ導く一声のにをいがけを心に置いておたすけに励もう

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、年祭活動の上にお励みくださいまして、誠にご苦労様でございます。只今は、ご参拝くださいました皆様と共に、3月の月次祭を滞りなく勇んで勤めさせていただき、大変ありがたい次第でございます。

暖冬と言われていました今年の冬は、予想に反して厳しい寒さが続きましたが、その寒さも徐々に和らいで、だんだんと春らしい気候になってまいりました。来月ぐらいから田植えのシーズンになります。今は苗作りなど準備の時期ですが、もう少し暖かくなれば田植えが始まります。田植えが済めば、田んぼの管理が始まり、追肥やしなどの丹精が施されて、秋に収穫の時期を迎えます。

みかぐらうたの七下り目は、種まきに例えてお諭しくださっているお歌ですから、土地について、特に田んぼや畑、いわゆる「でんぢ」という言葉がたくさん出てきます。三ツと四ツには、

三ツ　みなせかいのこゝろにハ　でんぢのいらぬものハない
四ツ　よきぢがあらバ一れつに　たれもほしいであらうがな

と、当時の日本の人口の8割は農家でしたので、農事に例えてお諭しくださっているのですが、田畑のいらない者はない。しかも「よきぢ」つまり日当たりが良く、水はけもよく、土地の肥えた、たくさんの収穫が見込める美田（びでん）ならば誰もが欲しいだろうと仰せになっています。当時の人々の真っ当な心情を歌っておられます。

七ツ　なんでもでんぢがほしいから　あたへハなにほどいるとても

とあるように、良いものほど値段は高いものです。農作物がたわわに実る土地を求めようとすれば、それにふさわしい対価、費用が必要になります。

八ツ　やしきハかみのでんぢやで　まいたるたねハみなはへる
九ツ　こゝハこのよのでんぢなら　わしもしつかりたねをまこ

とあります。屋敷とは、もちろんぢば・お屋敷のことです。ぢば・お屋敷は世界の苗代であり、神様の田地ですから、ここに蒔かれた種からは必ず芽が出る。だからぢば・お屋敷にしっかりと真実の種を蒔こうとお歌いくださっているのです。私たちは、この道の信仰を通して、おぢばに種を蒔かせていただいています。例えばおぢば帰り。おぢばへ帰るには、時間もかかれば費用もかかります。遠方ならなおさらです。おぢば帰りのために時間や日にちをお供えする。費用も尽くす。これも、おぢばに蒔く真実の種になります。

また、おぢばでひのきしんをさせていただく、御用の一つも担わせていただく。これは身をもって伏せ込む真実の種です。たとえおぢばに帰れなくても、教会へ運ぶお供えは、その後、親親の理を添えておぢばへ尽くし運ばせていただくものですから、これも真実の種蒔きになるのです。

私たちはさまざまな形をもって、神の田地であるおぢばに種を蒔かせていただいているわけです。おぢばに蒔いた種は必ず芽が出ます。これは間違いがありません。

でも、その芽が順調に育つかどうかは、その次の問題だと思い

ます。そのまま放っておいたら、育つものも育ちません。温(ぬく)みや水分、栄養を与えるから芽は育ち、大きく成長するのです。では、どのようにして栄養を与えるのか。これを七下り目のお歌から思案すると、最初のおうたは、

一ツ　ひとことはなしハひのきしん　にほひばかりをかけておく

です。「ひとことはなしハひのきしん」とは、ひのきしんについて一言取り次いでくれと仰るわけです。てをどりでは、ひのきしんの手は両手両足を使って前に進んでいく手振りです。駆けつける手振りといえます。どこに駆けつけるのか。それは、言うまでもなく、おぢばへ駆けつけるのです。つまり、にをいがけに際して、「おぢばへ帰らせていただきましょう」「おぢばでひのきしんをさせていただきましょう」と一言のにをいをかけてくれとのお歌であると思います。おぢばへ帰りましょう、おぢばに種を蒔きましょうと相手に掛ける、この一声が、芽が育ち、大きく成長するための肥料になり、栄養になるのだと悟らせていただくのです。

人間世界はおぢばから創(はじ)まりました。お道の信仰もおぢばに根差しています。よろづたすけのかぐらづとめは、おぢばで勤められ、そのたすけの理はおぢばからいただきます。ようぼくになるのも、教会の理を戴くのもおぢばからです。世界たすけのスタート地点であり、陽気ぐらしへの出発点でもあります。おぢばへ帰らせていただく、おぢばへ導かせていただくことが、信仰活動の一つの原点だと思います。

年祭活動2年目の目標として、「1教会2名以上の初席者の御守護」を掲げましたが、これもおぢばへお連れすることで成し遂げられるのです。

おぢばへ導く一言のにをいがけ。この一声を心に置いて、にをいがけ、おたすけに励ませていただき、初席者の丹精を重ねていきたいと思います。

さて、これから年度末にかけまして、おぢばでは「春の学生おぢばがえり」が、そして大教会では「わかぎの集い」と「少年会芦津団総会」が立て続けに開催されます。対象となる教会長、ようぼく、信者子弟にこれらの育成行事への声を掛けて参加を促すことが、諭達に示される末代の道への縦の伝道の一歩一歩の積み重ねになります。この道がこれから末代かけて続き、しかも頼もしい道の御守護を頂けるように、次の世代の育成、丹精にしっかりと努めさせていただきたいと思います。

来月4月18日は、教祖には226回目の誕生日をお迎えあそばされ、御本部にて教祖誕生祭が執り行われます。4月は、神の田地に誠真実を尽くし運ばせていただく仕切りの月でもあります。来月は私たちの真実をおぢばへ精いっぱい運ばせていただきたいと思います。

どうか、かかる上の心勇んだご丹精を最後にお願いいたしまして、挨拶にさせていただきます。今月の月次祭も、滞りなく勇んで勤めさせていただくことができました。ありがとうございました。

（要約）

《3月月次祭　神殿講話》

信じてもたれ切って通る中にたすけの実をお見せいただける

役員　山田道弘

信じるからたすかる道

2月7日、おたすけのお供えを運びにおぢばへ帰らせていただきました。ならん中のお願いで、家族は必死に真実を寄せてお供えをつくったのですが、他家へ嫁いだ2人の娘が、「主人たちから『医者が99％無理だと言っているのに、なぜ借金までして大金を供える必要があるのか分からない』と言われた」と言っていました。

なるほど、私たちは親神様の御守護、教祖が御存命でお働きくださっていることを肌で知っていますが、結婚を機にお道と出会い、まだその御守護の姿、教祖御存命のお働きを目の当たりにしたことがない主人たちにとっては率直な意見だと思います。

しかし、私たちの信仰の元一日を振り返ったとき、その大半は全く何も分からないところから、一布教師に声を掛けられ、ならん中をおたすけいただいたことから始まっています。親神様を信じる、御存命の教祖にもたれて通ることが信仰の始まりであり、信じてもたれていなければ、形だけの信心になってしまいます。

飯降伊蔵先生の入信のきっかけは、妻おさとさんの産後の患いをたすけていただいたことに始まっています。そのとき教祖は、

「救けてやろ。救けてやるけれども、天理王命という神は、初めての事なれば、誠にする事むつかしかろ。」

『稿本天理教教祖伝』49頁

と仰せられました。

教祖は最初に「救けてやろ」と仰せられているわけですから、「信じることができればたすかる」ということに他なりません。

伊蔵先生は、教祖から頂戴した散薬をおさとさんに頂かせたところ、気分が良くなってきました。夜の明けるのを待ちかねてお屋敷へ帰らせていただき、事の由を申し上げると、「神様は、救けてやろ、と仰るにつき、案じてはいかん。」と仰せられ、再度しっかりと信じて凭れるよう仰せられました。また散薬を頂戴しておさとさんに頂かせたところ、また気分が良くなった。実に、その夜は3度もお屋敷へ帰らせていただいています。

御守護の喜びをすぐさま御礼にとその気持ちを運んでくる、その真実は教祖に届かぬはずはありません。これこそ真実の尽くし運びでしょうし、伊蔵先生は、初めて聞いた神様を信じて疑わずに御守護におすがりしたのだと思います。

もたれるからたすかる道

嘉永7年、おはる様が初産のためにお屋敷へ帰って来られたときお腹に息を3度かけ、同じく3度撫でておかれました。

出産当日は近畿地方に大地震が発生し、家が大きく揺れ、土壁が落ちてくるような中、おはる様は無事に男の子を安産されました。清水ゆきさんは、おはる様が頂かれた不思議な御守護に感じ入り、懐妊した際にをびや許しを願い出ました。教祖は、

「人間思案は一切要らぬ。親神様に凭れ安心して産ませて頂くよう。」

同37頁

と、仰せくださいました。

ところがゆきさんは教祖のお言葉にもたれ切れず、当時の風習、習慣にそのまま従うと、産後の熱で伏せってしまった。なぜ御守護を頂けなかったのかを尋ねると、

「疑いの心があったからや。」

同前

との仰せであり、なるほどと得心しました。翌年、妊娠した際に再度をびや許しを願い出て、今度は仰せのままにもたれ切ったところ、安産でき、産後の肥立ちも良く過ごすことができました。

お道を信仰するお互いは、頭で考えるよりも、まずは親神様の御守護を信じ切り、教祖の親心にも

たれ切ることが大切です。そこに不思議珍しいたすけの実を頂戴する根本があるのです。

不思議が神

「論達」の中で真柱様は、節とは親神様の大きな親心であり、親神様が私たちの行き先を心配して、身上や事情に表して知らせてくださると仰せくださいます。それを信じ切れば、幾重の節の中も必ず喜びを探して通らせてもらえる。

こゝろすみきれごくらくや
十下り目　四ツ

とは、親神様を信じて疑わない心になることだと思います。

2月3日のことです。教会住み込みで勤めているA君が、心肺停止の状態で発見されました。

彼はその日まで3日ほど体調不良で寝込んでいましたが、その日は家族で身内の葬儀に参拝することになっていたので、「大切な方の葬儀だから、お別れだけは行かせてもらったほうがいい。間もなく家族が教会に来るから、準備をしておくように」と声を掛けに行きました。その後、父親が彼を部屋に迎えに行くと、間もなく携帯が鳴り、「大変だ！　死んでいる！」との連絡が来ました。大慌てで駆けつけると、A君が横たわっており、頸動脈に反応はなく、呼吸もしていません。顔は土気色になっていて手足は冷たくなっていました。直ぐにおさづけを取り次ぎ、心臓マッサージを始め、救急車の到着を待ちましたが、A君は一向に反応がありません。

彼は札幌の救命救急センターがある病院に搬送されました。それから、急いで大教会のお願いづとめ願いを送り、教会でお願いづとめをしました。

搬送から約50分が経過し、彼の兄から連絡が入りました。意識はないが心臓は動いていて、自発呼吸ができているとのことでした。息を吹き返すという御守護の姿は見せていただいたものの、医者からは「99％意識が戻ることはありません。これから3日以内が山でしょう」と言われました。それでも彼の心臓が再び動き、自発呼吸ができているというのは、奇跡としか言いようがありません。

それから3日と仕切って、おつとめにたすかりを願い、毎日おさづけの取り次ぎに通いました。家族は話し合ってお供えの心定めをし、6日の朝、教会へ運んでくれましたので、神前に供え、その日の夜の便で私は大教会へ向かいました。空港で、MRIと脳波の検査結果の連絡が入りました。普通、低酸素脳症を起こした脳のMRI画像は脳の外側が真っ白になって映るのですが、全く何ともない。脳波の反応は正常に近い反応で、医者が驚くような結果でした。

心を定めて必死にお供えをつくってきたであろう家族の姿を思い浮かべると、心を定めた瞬間から親神様、教祖がお働きくだされ、御守護の姿として見せていただいた結果だと感じました。

翌日の大教会の朝づとめにお供えを神前に供えていただき、それからおぢばへ向かい、大教会長様におぢばに運んでいただきました。教会では10時よりお願いづとめを勤め、私は同時刻にかんろだいの前でお願いづとめを勤めました。

その後も、連日、代わる代わるおたすけに通う中に、強い刺激があると顔をしかめたり、手を握り返したり、自分の名前を発したとの報告もありました。

病院に運ばれて10日後に一般病棟に移り、復帰に向けてリハビリをすることになりました。「運ばれて来たときの状態を考えると、ここまで回復した前例はない」と救命センターの医師が言うほどの御守護です。また、ようぼくの看護師さんがいらっしゃって、日に日に頂戴する御守護の姿に「おさづけって本当にすごいですね」と感激していました。

大教会長様からは「おふでさきにも、残念、立腹など、親神様は

時に厳しいお言葉を以てお仕込みも下さるが、その後には必ず、真実の心を定めて通れば守護してやろうという温かなお言葉を添えてくだされている。親神様の御守護を信じて、真実を定めて通らせてもらうように」と、励ましのお言葉を頂戴しました。

このよふハいかほどハがみをもふても
神のりいふくこれハかなハん
五号　3

みのうちのなやむ事をばしやんして
神にもたれる心しやんせ
五号　10

どのよふなむつかし事とゆうたとて
神のぢうよふはやくみせたい
五号　11

しんぢつの心を神がうけとれば
いかなぢうよふしてみせるてな
五号　14

道も代を重ねる中に、「神様を感じた体験や経験がない」という言葉も耳にします。

冒頭に話した２人の娘の主人たちも、そうした体験、経験がないのですから、神様を信じることがどういうことなのかが分からないのも当然でしょう。また、頭では理解しているといっても、信仰の実践がない方も同じでしょう。

教祖は、

『**在るといへばある、ないといへばない。ねがふこゝろの誠から、見えるりやくが神の姿やで**』

『正文遺韻』266頁

とお聞かせくださいました。

親神様の十全の御守護は目には見えづらく、人は見える世界のみでしか判断の基準が持てないのかも知れません。私たちは親神様のお目から見れば、まだまだ未熟な、成人の鈍いお互いでしょう。

しかし、親神様は、厳しい節の中も、心を定めて通るならば、「たすけたい」との親心で御守護を請け負ってくださるのですから、こんなにありがたいことはありません。

節は、子供の行く末を案じられる上からの大きな親心だと悟り、心次第でたすけていただけることを信じ、もたれ切って通ることが大切で、時に奇跡や不思議な御守護の中に親神様の御守護、教祖のお働きをお見せいただいて、成人の道中へとお導きくださるのです。

言い訳をせずに年祭活動を

今から約10年前、北海道教区で教祖百三十年祭に向けての決起の集いを開催した際、前真柱様がお入り込みくだされました。そのとき、「銘々の先案じが難儀の元になる。自分たち自身で心配を拵えている。親神様の仰せくださることを素直に聞けばいいのに、『そんなことを言っても』と返してしまう。今日から『そんなことを言っても』という言葉は禁句にしましょう」と仰せくださいました。

御守護を感じてありがたいというだけでなく、御守護に報いる御恩報じができてこそ、成人したと言えるのだと思います。恩を感じたら、「しなければならない」から「させてもらわずにはおれない」と変わってくる。そういう心になってこそ御恩報じです。

心の成人は、自ら進んでをやの御心を悟り、その思いに沿うような心を使い、実行すること。それが成人へと向かう姿で、「そんなことを言っても」と御守護に蓋（ふた）をするような心は禁句にして、年祭活動の歩みをさらに加速して歩ませていただきたいと思う次第です。

教祖が現身をお隠しになられたとき、人々は愕然とし、まさに暗闇に灯を失うが如くであったでしょう。しかし、「**どこにもいてはせんで**」とのお言葉を頂戴し、おたすけの上にお見せいただく不思議珍しい御守護の数々に、教祖が御存命でお働きくだされていることを実感し、心勇んでお通りくださって、今のお道があります。

目に見えぬ親神様の御守護、教祖御存命のお働きを実感するには、おたすけしかありません。おつとめに御守護を願い、おさづけの取り次ぎに教祖のお働きを頂戴して、通らせていただくしかないのです。

勤めたら勤めただけ、尽くしたら尽くしただけ、通ったら通っただけ、必ず結構な芽が吹く御守護としてお返しくださることを信じて、「１教会が２名以上の初席者を御守護頂こう」との目標に心を揃えて、「させてもらわずにはおれない」と、ますます年祭活動２年目を勇ませていただきたいと存じます。

（要旨）

立教百八十七年　三月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の天地抱き合わせの御守護に護られて、恙なき日々をお連れ通り頂き、成人の道をお導き下さいまして、漸く今日の姿へとお育て下さいます親心の程は、唯々有難く勿体ない極みでございます。私共は賜る御守護を拝謝して御恩報じに励ませて頂き、教祖百四十年祭の御用に勇ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、三月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には常日頃賜る数々の御恵みに御礼申し上げたいと参らせて頂きました芦津の道の子供達が、たすけ心を湛えて相共につとめの理に沿い切る状をも御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、時旬の道の進展を御守護下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、日々に心のほこりを払い、胸の掃除に努めて、成ってくる姿に親心を求め、親神様の思召に沿い切る心を定めて、一手一つに勇んでたすけ一条に動き働かせて頂く所存でございます。

何卒、時旬の御用に馳せ回る教会長、ようぼくの誠真実をお受け取り下さいまして、不思議自由の理も鮮やかに、おたすけと丹精の上に御守護を賜り、心の成人をお導き下さいまして、陽気ぐらし世界の実現への道をお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

三月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扉者	岩切正教	扉者	瀧本庄司		てをどり	地方	笛
指図方	井筒文夫	賛者	樋川泰士	賛者	松森誠太	座りづとめ	大教会長 湯川正圀 今川政治 会長夫人 前会長夫人 岡島きよの	奥田正德 山本義範 岩切正義	奥田眞治 川畑澄博 井筒敏成 瀧本眞二郎 岡島秀男 加世田洋
						前半	竹内義忠 梶川和隆 蔑内浩 吉田幸子 山田秀子 岩切治代	守田清一 吉田裕和 西本義之	木村真次 梶川芳男 河端芳雄 中村俊和 立花善文 立花善三
						後半	奥田正儀 川畑正博 望月慶太 山本広子 奥田千晶 石川石美	今川聖一 吉田裕樹 宗我道明	榎康紀 瀧本亘 石川健郎 岡本久昭 村田光伸 西本興正

ちゃんぽん　拍子木　太鼓　すりがね　小鼓

琴　三味線　胡弓

浜田たつゑ　奥田富美子　榎理恵子

宗我邦代　松本さだえ　河合遊喜恵

木村理恵　河合ふみ子　梶川正美

献饌長　守田清一

伝供　川畑澄博　竹内義忠　岩切正義　河端芳雄　西本義之　中村俊和　奥田正儀　岡本久昭　新居里実　西本興正　今川聖一　湯川正信　吉田裕樹　川畑正博　榎康紀　瀧本亘　梶川和人　望月慶太　梶川芳征　橋爪徹弥　山本繁正　北島久嗣　荒木志朗　久米義彦

大教会春季霊祭執行

３月24日、大教会神殿、祖霊殿で春季霊祭が厳かに執行された。

午前10時より神殿の儀で十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀。大教会長が祭文を奏上し、祭員列拝の後、在籍者、教会長、各会の代表者が祖霊殿前に参進し、参拝した。

祭典終了後、大教会長が挨拶。「初代から今までの道を考えたとき、先人たちは『どうでもこうでも』という思いで通ってくださった。そうした道のご苦労があればこそ今日の道がある。初代や先人先輩の信仰は、私たちを鼓舞し勇気づけてくれる。私たちも親神様の御期待に添えるよう、確かな道の御守護が頂けるよう、教祖百四十年祭を目指して、先人先輩方を手本にたすけ一条に励ませていただきたい」と話された。

教会長子弟育成者研修会

育成部（山田道弘部長）は、３月24日午後１時30分より、大教会陽気ホールで本年の「教会長子弟育成者研修会」を開催し、直属育成責任者、育成担当者合わせて41名が参加した。

はじめに、大教会長よりお話。「まずはお互いが親神様、教祖にご安心いただけるようなようぼくに成人させていただくこと。これには一日一日を大切に、根気よくその積み重ねをしていくことが大事であり、これは子弟育成にも言えることである」とし、また「親と子に限らず、教会長とようぼく子弟の関係は、教会長が直接一人ひとりに声を掛け、心を掛けることが大切である」と育成する側の心構えをお話しくだされた。

次に、梶川和人部員による「道の後継者の集いⅢについて」。今年８月末より３次に分けて詰所で開催される「道の後継者の集いⅢ」についての概要を説明し、対象者への呼び掛けと一人でも多くの参加をお願いした。

続いて、瀧本庄司部員による「管内学校への進学について」。おぢばにある学校に関しての説明と、今芦津から減っている専修科、教校への進学が、教会へ繋がる子弟育成の一助となるとし、おぢば管内学校への入学を促した。

その後、子弟育成についての感話として、南方洋一・西浜分教会長と加世田陽子・大島分教会長夫人の２名が、自身の経験や通り方を踏まえ、わが子の育成に関して話した。

続いて、４人１組となってふりかえりの対話。大教会長のお話や２名の感話を聴いた上で、その感想や子弟育成について感じることなど、活発な意見交換がなされた。

最後に、加世田洋次長から育成部の諸連絡として教会家族名簿更新の話があり、山田育成部長の閉講挨拶。「この年祭活動の時旬に、まずは教会長夫妻から教祖のひながたを万分の一でも辿らせていただき、子供たちがお父さんやお母さんのようにならせてもらいたいと思ってもらえるような通り方をお互いさせていただきましょう」と締めくくり、閉会した。

次代を担う道の後継者を共に育てよう！

道の後継者の集いⅢ

教祖にお喜びいただける成人を目指して
～自分にできるおたすけ～

第一次：8/24（土）～25（日）
第二次：8/31（土）～9/1（日）
第三次：10/5（土）～6（日）

※1日目 11:30 受付、2日目 11:30 解散

対象：18才～48才のようぼく・信者子弟
場所：芦津詰所（1泊2日の合宿）
内容：ビデオ、グループワーク、懇親会など
受講御供：2500円　　申込締切：5/23

こちらから、オンラインでの参加申込可。
また、「集いⅢ」の概要がご覧になれます。

雅楽総合練習

3月21日、祭事部雅楽掛（奥田眞治掛長）は、泉裕一先生（亀岡部属・義立分教会長）をお招きして、詰所2階大広間にて雅楽総合練習を行った。

午前10時におぢばを遙拝。奥田掛長より「今日一日、有意義な練習になるよう、精いっぱいお励みいただきたい」と挨拶があり、初めての参加者3名が紹介された。

午前中は龍笛、篳篥（ひちりき）、笙の管別に分かれ、盤渉調の越殿楽と青海波の2曲を練習した。また篳篥の初心者2名は、別室で基礎から学んだ。

午後からは、箏（そう）と鞨鼓（かっこ）を入れた合奏練習を行い、細部に至るまでご指導を頂いた。

泉先生からは、「とても初心者が混じっているとは思えないような仕上がりです」との感想を頂いて、充実した練習となった。

参加者は12名。

次回の雅楽総合練習は、9月21日の予定です。初心者の方も、学生の方も大歓迎です。
どうかお声掛けのほどをよろしくお願いいたします。

祭事部雅楽掛

立教百八十七年　春季霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊藏の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代教会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようぼく、信者諸々の霊様、併せて一千五百九柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

初代真柱様並びに三柱の霊様には、道の親として神一条に苦心を重ねてご丹精下さり、温かき親心を以て道の子を導きお育て下さいました。お蔭を以て世界たすけの道が開けて、今日の道がございます。又、初代梅治郎の霊様には不思議なお手引きによりこれの御教えにお引き寄せ頂かれ、爾来御恩報じの思い一つに教祖にお仕え下さり、神一条に真実を尽くし伏せ込まれて、大木の根のお働きをなし下さいました。又、夫々の霊様には、親神様のお手引きのまに〳〵眞明芦津の道の草分けの頃から、代々ならん中をも誠真実の心でお勤め下され、或は国々処々に在っては、艱難苦労の道すがらも心倒さず真心を尽くして、たすけ一条にお励み下さいました。これの道が年限と共に結構な理をお見せ頂き、幾重の事情も乗り越えて、今日も変わらず御教え通りの道を通らせて頂けますのも、親神様、教祖の厚き御守護、深き親心の現われではございますが、又一つには道の親のお導きと、芦津の霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とてはございません。その中にも今日のこの日は、今年の春の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので、只今は、陽気に十二下りのてをどりを勤めさせて頂きましたので、御前に種々の心尽しの物を供え、在籍者をはじめ、参き集う人々と共に、ご遺徳を偲び、ご生前のご丹精を改めて厚く御礼申し上げます。

私共芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、永の年月、道のために真実を尽し伏せ込まれました霊様方のご苦労ご苦心と、真心溢れるご丹精に心から感謝を申し上げ、教祖年祭の旬に相応しい成人の足取りを、一手一つに心勇んで進めさせて頂く所存でございます。

何卒、教会長、ようぼくが時旬の御用に勇み励む状を御照覧下さいまして、たすけ一条の道の上に尚も嬉しい御守護をお見せ頂けますようお力添えの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

あしつスプリングフェスタ開催

３月27日から30日まで、育成部（山田道弘部長）は、春の若年層育成期間「あしつスプリングフェスタ」を開催した。今年は例年に比べて桜の開花が大きく遅れるほど、肌寒い日が続いたが、期間中は晴天に恵まれ、芦津に繋がる大勢の若者や少年会員がおぢば、大教会に集まった。

ＨＡＰＰＹ徒歩団参

３月27日、学生会を中心に大教会からおぢばへの徒歩団参を実施。中学生から25歳までの若者34名がおぢばを目指した。

午前９時30分、大教会に集合し、班ごとに自己紹介をした後、10時からのお願いづとめに参拝。10時30分にマイクロバス２台で大教会を出発し、十三峠登り口からおぢばへ向けて歩き始めた。

前日の嵐のような雨が嘘のような快晴の御守護を頂き、学生たちは急勾配の上り坂を励まし合いながら歩いた。十三峠展望台で記念撮影の後、下り坂では学生同士が和やかに話しながら歩いた。平群スポーツセンターで昼食後、再びバスで移動。奈良県浄化センターから、再度おぢばを目指し歩き始めた。

午後４時、本部神殿前に到着。約13㎞の道のりを全員が笑顔で歩き切った。

参加者からは「最初の上り坂がしんどかったけど、最後まで歩けて楽しかった」「初めての参加でしたが、新しい友達ができて良かった」などの感想が聞かれた。

春の学生おぢばがえり

３月28日、「次代を担うようぼくへ」をスローガンに「春の学生おぢばがえり」が本部中庭で開催され、芦津学生会（森道治委員長）から53名の学生が参加した。

式典では、井筒いつみさん（直轄）が司会を務め、真柱様からメッセージを頂戴し、学生２名が感話を行った。

式典終了後、詰所で直属アワーを開催。はじめに大教会長が挨拶「ちょっとした心づかい、行いを積み重ねることが、これから夢や目標に向かってより良い人生を送る基礎になる」と陰の徳積みの大切さについて話された。そして「芦津に繋がる仲間と睦み合い、この機会に学んだことや気付いたことをこれからの生活に生かしてほしい」と望まれた。

続いて森委員長が、「親神様のお引き寄せに感謝して大いに楽しんでもらいたい」と挨拶し、昼食。その後は、班別対抗ゲームなどで交流を深め、最後に班ごとにケーキを作った。

また、前日の夕づとめ後には、東西泉水プール前広場を会場に「春ＦＥＳ」が開催され、５年ぶりとなるステージなどで盛り上がり、芦津直属隊も会場へ赴いた。

参加者からは「めっちゃ楽しかった」「知り合いがいなかったので不安だったが、班の子と仲良くなって楽しめた」などの感想があった。

わかぎの集い

３月29、30日、中学生を対象に「わかぎの集い」を大教会で開催し、13名が参加した。

午前10時、神殿で開講式の後、おつとめ練習。翌日の少年会総会で勤める座りづとめを、各パートに分かれての練習。参加者はそれぞれの担当の先生の話を真剣に聞き入り、

熱心に取り組んだ。その後、神殿で全体練習を行った。

続いて、陽気ホールに場所を移して、ウォーミングアップ。学生スタッフ進行の下、全体で親睦を図るゲームを行い、その後は班に分かれての対抗ゲームを行うなど、笑顔溢れる楽しい時間となった。

昼食後、午後からは、難波（大阪市中央区）に移動し、100個以上の看板を探し出すフォトテーリングを班対抗で行いながら、観光スポットで班ごとに写真を撮るなど親睦を深めた。

帰会し夕づとめ後、食堂で会食。たこ焼きパーティーを和やかな雰囲気で行い、終盤は、声の大きさを競う「ありがとう選手権」で、大いに盛り上がった。

入浴後、21時から陽気ホールでおやすみ行事を行い、高馬丈典・少年会委員のお話の後、午後からのフォトテーリングの結果発表を行った。

翌30日朝、神殿で閉講式。始めに大教会長の挨拶があり、少年会の「3つの約束」を生活の中で活かすよう話された。

その後、振り返りのスライドショーを観賞し、記念撮影を行い閉講した。

少年会総会

3月30日、少年会芦津団（加世田洋団長）は大教会で第52回総会を開催し、少年会員219名、育成会員351名、計570名が集まった。

午前10時、親神様、教祖、祖霊様を礼拝後、加藤心洋音さん（直轄隊）が開会の辞を述べ、続いて、祭主・森朗彦君（芦南隊）、扈者・畠中歩君、山下陽助君（共に芦山都隊）が入場し、森君が祭文を奏上。

この後、おつとめ。わかぎの集い参加者、門出生を中心とした中学生が座りづとめ、よろづよ八首を勤めた後、各隊が二下りずつ交替で勤め、親神様、教祖に練習の成果をご覧いただいた。

式典では、少年会長様の御告辞を加世田団長が代読し、その後、大教会長がお話。今夏も開催されるこどもおぢばがえりの3つの約束「生きるよろこびを味わいます」「ものを大切にします」「仲良くたすけあいます」を分かりやすく説明され、「この3つの約束が私たちが生きていく上で大切な教えなので、忘れずに家庭でも学校生活でも活かして実行してください」と話された。そして、「今年のこどもおぢばがえりもお友達を誘って、おぢばに帰ってください」と参加を促された。

続いて、今春中学校を卒業する門出生33名を代表し、奥田晴子さん（直轄隊）と小村真央さん（吉野川隊）が教祖の御前で「門出の言葉」を述べた。

次に、お供え作品展入選者を代表して、松本天君（神滝本隊）に大教会長から賞状と記念品が授与された。その後、仁尾和歩さん（三好隊）、高森柚奈さん（脇町隊）が演台前に進み、全員で「ちかい」を唱和した後、「少年会の歌」を歌い、山下成美さん（芦山都隊）が閉会の辞を述べた。

この後門出生は対面所で、「成人門出式」を行い、大教会長からのお話があり、お祝いの品が手渡された。

午後からのお楽しみ行事では、模擬店、ゲームコーナーや、参道に今年もピッキートランポリンが登場。また、参加者が一人ずつマイクで「ありがとう」と叫び、声の大きさを競う「ありがとう選手権」が正面階段で行われ、年代毎の優勝者に景品が渡されるなど、大いに盛り上がりを見せた。

会長室報

眞明編集局
岡島　藤也
立教187年３月23日

祭事部
部長
山本　義範
次長
奥田　眞治

教務部
次長
浜田　宣郎
立教187年４月１日

専修科生
畠山　雅也（芦　玉）

教務部報

教養掛（１月～３月）
教養掛主任
井筒　文夫
教養掛
奥田　正儀・石﨑　真人

教人登録
田中　宣次（芦　玉）
立教187年３月８日

教人資格講習会第139回修了
奥　文也（二　名）
奥　梨香（二　名）
立教187年３月12日

おさづけの理拝戴《２月》
小村　真生（吉野川）
吉田　理人（今津原）
出島　広平（神の島）
〈拝戴日順　３名〉

初席《２月》
〈２名〉三好
〈１名〉東天童、白地、島原、順世、大玉
〈順序運びより　７名〉

月例統計（自令和６年１月１日～至令和６年２月29日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	のお理さ拝づ戴け	修養科修了	教人
大教会（1）	4	6		
靱（13）				
東津（23）	2			
吉野川（29）	4	1		
島原（16）	2			
日方（15）	2	1		
稗島（7）	1			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）				
門司（6）				
當別（6）				
大島（26）	1			
沖縄（3）				
尼崎（2）	1			
四ツ山（5）				
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）				
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	6			
勝明（1）				
神の島（1）		1		
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1			
神滝本（1）				
芦明徳（1）				
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	24	9	0	0

少年会芦津団キャンプ
5月25日（土）
大阪市立信太山青少年野外活動センター
大教会出発：午前９時10分　大教会解散：午後５時
参加費：1000円　対象：小学４年生～中学３年生
内容：野外活動ゲーム、バーベキュー、夕べのつどい
申込締切：５月15日まで

芦津学生会
総会
6.30（日）
午前10時開会
おつとめ・式典
アトラクション
教祖年祭へむけ
心をひとつに